

内田 麻理香 評 (東大特任准教授・科学技術社会論)

科学社会学への招待

マッシミアノ・ブッキ著、伊藤憲二、水島希、藤木信穂訳

(さいはて社・3300円)



科学は専門家だけが扱う特別な領域で、一般の人が手を触れにくいというイメージは根強い。しかし、科学は自然から切り出された「神聖」な知ではなく、社会の制度や価値観とも相互作用する営みである。AIや気候変動など、科学をめぐる課題に向き合う機会が増える

自分との意外な関係が次々と……

いま、この視点は一層重要である。このような科学と社会の関係を探究してきたのが、科学社会学という研究分野だ。本書は、科学社会学の成り立ちや主要な議論を、初学者にも理解しやすくまとめた入門書である。構成は明快で、科学と社会の関係を考える際の手がかりが簡潔に整理されている。

著者が指摘するように、科学社会学はしばしば「反科学主義」などの蔑称で否定されることがあ

る。確かに「自然は存在しない、すべては社会によって構築された」という極端な主張をする科学社会学者もいるが、それは分野全体を代表しない。分野内でも、相対主義や構築主義をめぐる鋭い

議論が交わされているのである。本書は、こうした分野の広がりを見えなく俯瞰できる一冊である。

科学社会学の誕生は遅れたが、これは科学の社会的役割がなかなか認知されなかったためである。第二次世界大戦での核開発や、スプートニク・ショックに象徴される冷戦期の米ソの科学技術競争を経て、科学・技術が政治や経済に大きな影響を及ぼすことが明確になり、ようやく社会学としての関

心に向けられるようになった。また、科学は他の人間活動とは異なる特別な営みだという見方が強く、神聖視され守られていたことも、社会学として対象にされなかった理由とされる。

著者は、科学コミュニケーション分野の第一人者として知られるが、その出発点は社会学である。この分野の役割は、「難しい科学をわかりやすく伝えること」と単に純化されがちなが、本書を読めば、

知識の生産そのものにも科学コミュニケーションが深く関わっていることがわかる。

科学的知識が社会に普及するとき、論文から教科書へ、そして一般向けの報道へとという順序を踏み、専門内から公衆レベルに段階的に情報が伝わるというイメージが強い。しかし、このルートを逸脱する事例も数多い。専門間で複数の説で紛糾している時であって

も、先に公衆レベルで特定の説が認知され、それによって専門家間でも決着がつくというパターンである。

オゾン層破壊のフロン類原因説は、当初、専門家の間でも議論が続いていた。フロン説を主張する科学者たちは、オゾン「ホール」の画像が緊急事態を警告する効果的な手段であると判断した。この画像のインパクトが政策決定を後押しし、モントリオール議定書ではフロン排出量の削減を基準とする国際的合意がまとめられ、オゾン層破壊はフロン類が原因であるという

説が強化された。こうした「逸脱」は、公衆が知識を受け取るだけでなく、公共的言説が科学的知識の形成にも影響し得ることを示す。本書では、このような事例研究が数多く紹介されている点も魅力である。科学の意外な顔が次々と示され、専門書でありながら読み物としても十分に楽しめる。科学を「敬して遠ざける」存在としてではなく、自分との関係を改めて結び直す契機を得られるだろう。